

舟とかきては、みをひきの舟とよめり、又萬葉云、水咫<sup>ツ</sup>衝石<sup>シ</sup>こ、ろつくして思かもこのまももとな夢にしみゆる、私云、このまはこぬまとよめる、又土佐日記云、みをつくしのほどよりいで、なにはづにつきて、河尻にいるといへり、國史には、難波津に始立、落標之由あり、其年可考、○中略

つの國に、みをつくしをもたてられ、又みをつくしと云所もあれば、外にはよまん、は、からしきに、萬葉云、

とをたあふみいなさほそ江のみをつくしあれをたのめてあさまし物を  
又つの國にとりても、ほかによめり、相模歌、

住よしのほそ江にさせるみをつくしふかきにまけぬ人にあらじな  
河によめる歌

河波もうしをもかゝるみをつくしよるかたもなき戀もするかな  
能因歌枕云、みをつくしとは、水のふかき所にたつる木をいふ也、

〔倭訓栞<sup>美</sup>前編三十〕みをつくし 落標をよめり、萬葉集に、水咫衝石と書り、咫をとよめるは心得  
がたし、水脈の籤の義なるべし、尺寸を記したる木を立置て、水の淺深を量る物也といへり、○中略

落は水零二合をもて、水尾の義に取なるべし、字書の正義にあらず、荀子に、水行者表深、表不明則  
陷、注に、表標準也と見えたり、

〔雅言集覽<sup>美</sup>四十九〕みをつくし ○中略 信友云、みをは、水脈ノ字ヲアテタルガ本義ニテ、其水脈ノ標  
ヲ、みをつくしト云フニ、落標トカクモ合ヘリ、サテつくしノツハ助辭、くしハ籤ノ義ナルベシ、み

を木、みを杭ナドイフヲモオモフベシ、シカルニ萬葉ニ、水咫衝石ト書ルハ、コノみをつくしニテ、  
オノツカラ汐ノ満干ヲモ量ラル、意ヲ用キテ、書ナセルモノナルベシ、サテ又落字今ノ字書ド

モニ、水ノ名トノミアリテ義詳ナラズ、落標ハモト漢語ナルベシ、出處考フベシ、